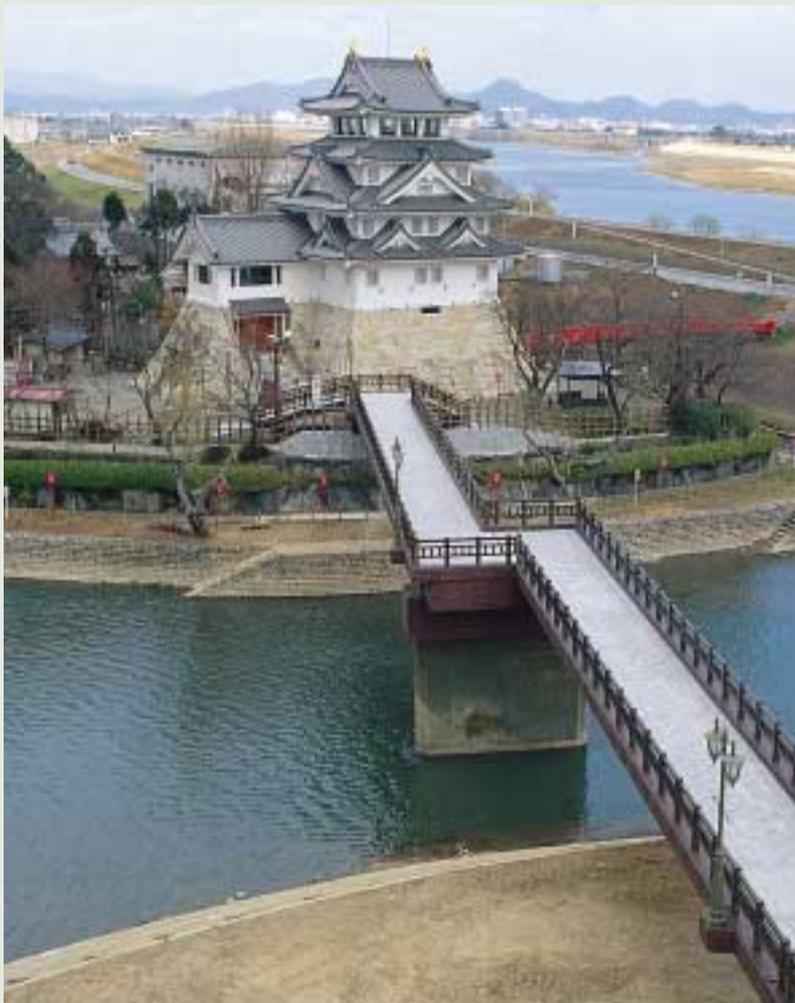


木曾川

木曾川文庫は治水の資料館。
水の大切さや恐ろしさを歴史から学び、これからの治水を皆様とともに考えていきたいと思ひます。
夏号は周囲を川に囲まれた墨俣町から、その歴史や輪中の成立を、
伊勢湾台風シリーズ第三編では、堤防の被災状況を中心に特集します。



INDEX.....

ふるさとの街・探訪記《墨俣町》

変遷する川の流路とともに、歴史を重ねた墨俣町

AREA REPORT

川の路を利用し、綿密な計画で築城した墨俣城

気ままにJOURNEY

数々の浪漫と栄華を伝える、美濃路の宿場町

歴史ドキュメント

記録を塗り替えた高潮災害で、
壊滅的な被害を受けた海岸・河川堤防

TALK&TALK

被災者が語る伊勢湾台風の猛威

民話の小箱

橋杭笑地蔵



変遷する川の流路とともに歴史を重ねた墨俣町

墨俣町は、長良川西岸に沿って開けた輪中地帯。鎌倉街道や美濃路の要所として、西濃地方の交通・経済・文化の中心として、繁栄してきた宿場町。その歴史は、川の恩恵を受けながらも、乱流を繰り返す水との闘いだった。そして交通網が整備された現在、岐阜や大垣のベッドタウンとして成長を遂げています。



墨俣町の航空写真



地形と町名の由来

安八郡墨俣町は、岐阜県の南西部、濃尾平野の西北に位置する低湿地帯です。長良川西岸に沿って墨俣輪中を形成しています。町の北部には犀川や五六川、天王川などの諸川が集まり、町の東境を南に流れる長良川はかつて墨俣川と呼ばれていた大河川でした。古代の木曾川は下図のように現代よりはるか北を流れており、現在の羽島市小熊町（対岸は墨俣町上宿）で長良川と合流していましたが、この木曾・長良川の合流点あたりを墨俣川と呼んでおり、合流以降の長良川本川も同じく墨俣川と称していました。この墨俣の別称は洲の股、河の洲が股のように分かれていたことからこう呼ばれ、町の名も墨俣と名づけられたと伝えられています。墨俣川をはじめ小河川が乱流していた町の歴史は、水との闘いであつたといえます。

物部郷と墨俣

大和時代のこの一帯は、安八六郷に所属していました。那珂、太田、物部、安八、服織、長友が安八六郷で、墨俣町は、物部氏が支配する物部郷にありました。物部氏は大和朝廷の軍事を司った重臣。当時の墨俣は、木曾・長良・揖斐川の合流点にあたり、交通上・軍事上の要地でした。



現在の墨俣町

できました。このため墨俣は、杭瀬川と墨俣川（現在の木曾・長良川）、犀川、中須川と東西南北を河川で囲まれた地域となりました。墨俣の北を流れる犀川はたびたび北部の集落に浸水し、また、墨俣川は西部の集落をおびやかしめました。中須川は墨俣川と杭瀬川を結び小河川。墨俣川の水を揖斐川本流に流していました。時には反対に、揖斐川の水を長良川に逆流させ、墨俣南部の集落は、度々なる洪水に苦しんでいました。この墨俣には中世のころから、犀川に面した堤防が築かれていましたが、南部には堤防がなく、ここに堤防を築いて完全な輪中となつたのは、寛文八年（一六六八）のこと。墨俣町は旧結村（現在の安八町の一部）とともに一つの輪中を作っていたので、この輪中を墨俣輪中または結輪中と呼んでいます。

しかし、この堤防は堅固なものではなかったため、近世以降幾度も堤防決壊による水害を受け、今も、当時の決壊箇所付近には決壊による池の跡や決壊路に流入した土砂が堆積して畑になったところが見られます。

明治時代の河川改修

明治時代の廃藩置県により、江戸期の村々は明治四年名古屋県、笠松県、岐阜県に所属その後、変遷を繰り返して、明治三〇年に現在の墨俣町が生まれました。美濃路の宿場町として発展してきた墨俣町も、東海道線が開通すると宿場町の機能を失い、明治前半には洪水も続いたので、往時の繁栄は影をひそめました。

明治年間におきた相次ぐ水害に苦しめられた西濃の各輪中にとって最大の問題は、治水でした。こうした地元からの要請を受け、明治政府は木曾三川下流改修（明治坂改修）を実施。長良川筋上流部の工事の目的は、中須川・中村川・大樽川の三つの派川を締切って、揖斐川への出水を断つことでした。しかし、工事中に濃尾震災や大洪水に見舞われ予定通りに工事が進まず、ようやく大正五年に全部が竣工。工事の結果、墨俣町と安八町の間を流れていた中須川



木曾三川の流路変遷

このため、物部氏は早くから土地を拓き、拠点としたと考えられています。

墨俣渡しと布施屋

中央集権の政治をとる上で必要なのは、官道を整えることでした。官道は諸国の国府から国府を結んで、次々に延長。美濃国では美濃国府より信濃国府を経て関東に行く東山道と、墨俣川を渡って尾張に入り東海道に行く鎌倉街道（後世の美濃路）が重要な官道として整備されました。当時、伊勢と桑名を結ぶ東海道の渡船が難所であつたことから、墨俣川を渡って東山道を通るコースが多く利用されました。平安初期には交通量も増し、艘の渡船では不便となつたため、承和二年（八三



大正改修後の犀川周辺 (Vol.20参照)

が締め切られて、下宿から森部までの新しい長良川の堤防は明治三二年度に完成しました。また西結村領家から南へ新しい堤防ができて、揖斐川へ流れていた中須川も締め切られました。この改修により水害は大幅に軽減しました。

軍隊も出動した犀川事件

墨俣町に北隣する本巣郡南部は扇状地の末端にあたるころ、天王川、中川、五六川、犀川などのほとんども、町の北東にある墨俣一夜城址あたりに集まり、長良川に合流しています。しかし、長良川の河床の方がこれらの河床より高い状態だったので、少しの雨でも本巣郡南部に水がたまり、農作に大きな被害をもたすていました。この打開策として、すでに江戸時代から犀川の堤防を切り割って、輪中の中央に新川を開削して犀川を南トさせ、長良川の合流点を下流に付け替えようという動きがありました。これが本格化されたのが昭和三年のこと。犀川改修計画が臨時国会で議決されたのです。しかし、墨俣町をはじめとした下流の村々にとって、水害の増加や耕地の減少を懸念して反対運動がおきました。これが第一次犀川事件です。絶対反対の立場をとる関係町村長以下役場職員が一斉に辞職。ついに警官と地元民との衝突が起り、軍隊が出動して犀川事件はようやく鎮静したのです。

改修による流路の締切やそれに伴う家屋の移転などにより、墨俣町の景観は以前と大きく

五)には、官費にて四艘に増船。墨俣川兩岸に布施屋（現在の無料沐浴所）が設けられました。布施屋には、中央への年貢など官物を運ぶ人夫や諸用で通る役人などの旅客が宿泊しました。この頃より諸国の駅には、「くつめ」「あそび」「つかれめ」などと呼ばれる遊女が登場。墨俣宿にも墨俣式部が現れ、歌曲今様などを歌ったといわれています。

鎌倉街道と名士の通行

鎌倉に幕府が開かれると東西の交通が頻繁となり、墨俣駅は一層重要性を帯びた要地となりました。この頃の墨俣駅は、現在の上下宿・下宿の地にありました。墨俣駅の大きな特徴は、船による船橋だったこと。建治三年（一二七）一〇月阿仏尼の十六夜日記に「洲にやあらんふ川には、舟を並べて、正木の洲にやあらんふ川とよめたる浮橋あり。いと危けれど、渡る...」と記されています。船橋とは、網にて船をつなぎ並べた橋のこと。その様相から浮橋とも呼んでいたのでしょう。西行法師はここを通り次のような和歌を残しています。「春くれば、つぐいすのまた梅にきて墨俣」実のなりはしめ花のおわり美濃・尾張



鎌倉街道

軍事上の要地、墨俣

交通上の要地、墨俣は軍事上の要地でもありました。養和元年（一一八一）の源平墨俣川の合戦では、西岸に平重衡・維盛ら七千余騎が陣し、東岸には源行家・義円（頼朝の弟）が軍勢を率いて陣取りました。先陣をきって墨俣川を渡った義円は戦死。この合戦で源氏は敗れましたが、源頼朝の威勢は日増しに高まり、ついに平家を滅ぼすことになりました。承久の乱（一二二二）では、鎌倉幕府に対

く変わりました。多くの犠牲を払った犀川改修竣工後の昭和三年、台風で長良川は大洪水となり、新犀川の調節樋門を「あける」「あけさせない」で本巣郡南部の人々と墨俣町・名森村の人々が対立した第二次犀川事件が勃発しました。あわや流血という惨事になりましたが輪中幹部・県・建設省の必死の説得で打開策がまとまり、第二次犀川事件は収まりました。

交通網の整備と長良大橋の完成

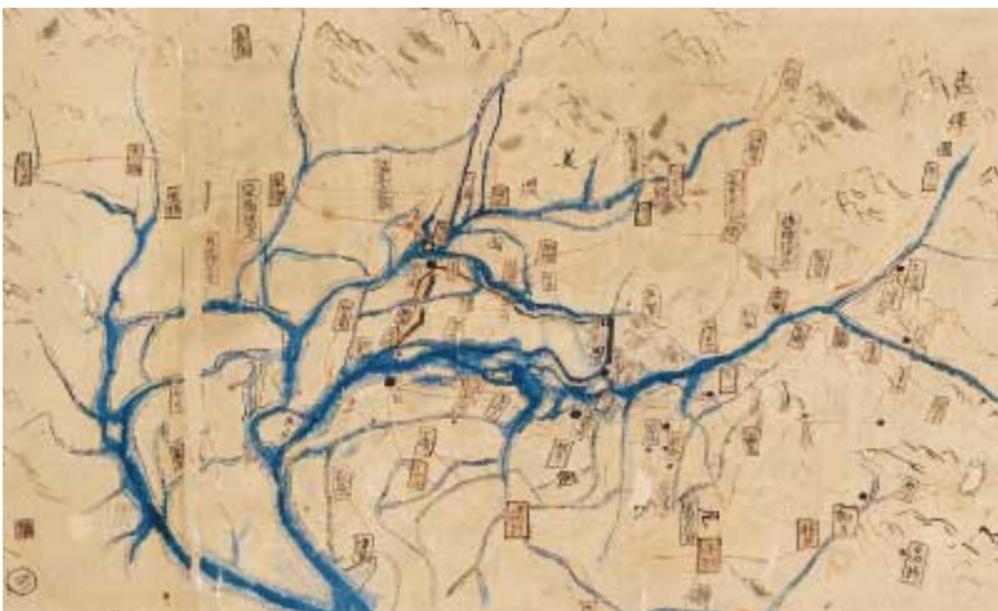
昭和初年の交通整備により、岐阜、墨俣、大垣を結ぶ岐垣国道が開通し、昭和八年には長良大橋が完成。過去何百年の伝統を持つ墨俣渡船は廃止され、墨俣をめぐる交通条件は一変しました。特に第二次世界大戦以降の高度経済成長の波を受け、墨俣町は岐阜・大垣市のベッドタウンとして成長。現在では、「第三次総合計画」に基づき多彩なプロジェクトが実施されています。



完成直前の長良大橋

参考文献

- 『墨俣町史』墨俣町発行
- 『すのまたのあゆみ』
- 『墨俣町教育委員会発行』
- 『町制一〇〇周年記念』
- 『写真で見ると明日のすのまた』墨俣町発行
- 『町制一〇〇周年記念要覧』墨俣町』
- 『墨俣町発行』
- 『岐阜県地名大辞典』角川書店発行



美濃国墨侯貢め図・部分（前野文書）

川の路を利用し、綿密な計画で築城した墨侯夜城

東国と西国を結ぶ要衝

墨侯は古来より、軍事上の要地でした。日本武尊は尾張熱田の宮より伊吹山へ向かう途中、墨侯を通られたとの伝えもあり、壬申の乱においては、大海人皇子が墨侯の渡しの女のたらい舟にかくまわれて、大友皇子の兵から逃れたといふ手治拾遺物語の話も残されています。地理的にみれば、墨侯は東国と西国の交通の接点にあたるころ。主要官道という陸の道と墨侯川という川の路を結ぶ要地であったため、時代の為政者は、ここを軍事上の拠点として重視していたのです。

木曾材運送の重要な拠点

現代社会のように交通網が整備されていなかった昔は、川の路、すなわち、河川を利用した物資の運搬が多く行われてきました。濃尾平野を流れる木曾・長良・揖斐の三川は、おおむね北から南に流れ伊勢湾に注いでいたため、東西の陸路交通には大きな障害となっていたのです。

木曾川運材概念図



しかし、海をもたない内陸の国にとっては、河川は海へ向かう重要なルート。木曾川は木曾山系からの材木輸送の重要な水路であり、長良川は全国的なシエラをもつ美濃紙の輸送水路でした。また、揖斐川をも含めた三川は、運材廻米など近世の領土経済の流通路でもありました。河川が重要なルートであった時代、木曾・長良両川の合流点である墨侯は、木曾材運送の重要な拠点となっていました。文明一五年（一四八三）、将軍足利義政は、銀閣寺を造営する時、その用材を木曾で伐採し木曾・長良川を筏で下って、墨侯の渡しに陸揚げした後、あらかじめ用意された牛車にひかせて大垣を通り、関ヶ原を経て京都へ届けられたといわれています。このルートを利用して、天下統一への第一歩としたのが木下藤吉郎後の豊臣秀吉でした。

美濃を制する者が天下を制す

天下統一をめざす織田信長が京に上るためには、音藤氏の居城である稲葉山城（岐阜城）を攻略する必要があります。その前線基地が墨侯。ここから信長の根城である清洲城まで二〇㎞。音藤龍興率いる稲葉山城まで二二㎞。稲葉山（現在の金華山）の動きが一目で眺望できる墨侯が美濃攻略の拠点である。信長は考えたのです。「美濃を制する者が天下を制す」。美濃稲葉山城攻略をめざす信長は、重臣佐久間信盛や柴田勝家へ命じ、墨侯築城を試みますが、いずれも失敗に終わりました。当時の墨侯は、まだ輪中が形成されておらず、木曾・長良の両川は自然の流れに任せ、雨



墨侯付近地図

が降ればたちまちその流路を変えていた荒地・河原。この難所に城を築くのは、たとえ信長生え抜きの重臣といえども至難の技でした。「墨侯は死地なり、死地また生地なり」死地ともいえる難所であった墨侯はまさに、天下への分かれ道。ここを生地として築城できる武将のみ、天下への道が開かれていたのだといえます。再三の失敗に業を煮やした信長は、築城という大任を木下藤吉郎に任命しました。当時足軽鉄砲隊百人組組頭の藤吉郎にとって、この事業は千載一遇の機会。蜂須賀小六を始めとする野武士集団・川並衆を率いて、築城に挑んだのです。

木下藤吉郎、築城への道

藤吉郎の墨侯築城を成功に導いた理由は、木曾七流・千人を越える川並衆の棟梁蜂須賀小六を最大協力者に得たことでした。そもそも藤吉郎と小六は眉州小折（現在の江南市）生駒家宗の屋敷でともに居候をしていた昔なじみ。藤吉郎から墨侯築城の相談を受けた小六は、「肌ごと」と臣従を約束したのでした。蜂須賀小六率いる川並衆の活動拠点は、当時、木曾七流と呼ばれた荒地の中。地形や洪水、気象状況に精通した彼らは、川の路や自

AREA REPORT

然の力を巧みに利用して、隠密に計画し、行動することができたのです。墨侯築城の計画は、次のようでした。

- 一 構築物 高櫓五棟、平櫓二棟、土手五〇間、高堀二二六間、馬柵一八〇〇間、井戸二か所、堀三六〇間、殿様御屋敷一か所、本戸二か所
- 二 材料の収集 右に要する築城諸材は木曾山において集め、河川を利用してこれを墨侯右岸に運搬する。
- 三 材料の整備 木曾左岸の地区において、設計図通り製材、これを運搬したたちに建築に着手する体制をとる。
- 四 擁護隊は蜂須賀をはじめとする野武士でももっており、その人数一三〇人。
- 五 作業の順序 第一に馬柵を作り、これによって敵を防衛しつつ、家屋を建築。最古迅速なるを要す。

城郭の大きさは、東西約二八m、南北約一〇九mでした。

綿密なる割普請構想

以上のような計画をもとに、莫大な数量の築城諸材は七首・八首（岐阜県七宗町）で伐りだし、錦織湊（八百津町）から飛騨川を利用して運輸。前野村（江南市）ほか河田の付近（岐阜県川島町）で陸揚げし製材した後、境川（木曾川）を運材の道とし、長材は川舟・田舟で墨侯へ。短材は、一人一本ずつかつぎ墨侯まで走る。この資材部隊とは別に、首



馬柵作りと護衛の鉄砲隊

脳部・戦闘部隊は松倉に集結し、起の渡し（犀西市）から境川を渡って、墨侯へ。まさに、体力・気力の限界を思わず、深夜の強行軍でした。

永禄九年（一五六六）九月二二日午前、時のろしを合図に、資材部隊、戦闘部隊による城材運搬が行われました。同日正午には、馬柵づくりに着手。敵が動く前に機重にも及び、堅固な馬柵を完成。馬柵で敵の足を止め鉄砲隊で攻撃しながら、その間にも着々と築城に専念するという作戦が功を奏し、一日には見事築城を完了させたのでした。

築城成功の最大要因は、川並衆をはじめ山方衆、舟方衆、大工衆、馬柵部隊などあらゆる職能集団を編成した割普請構想。さまざまな職能集団は整然かつ統率のこれた動きで、一夜ならぬ一夜かけて完成したのでした。これに加え、城材の押し出しを九月二二日に選んだことも勝因の一つ。この時期は、河川や沼沢は水量も少なく、稲刈りを終えたばかりで兵糧も豊富。建築と戦いの両面に有利との読みが的中したのでした。これは、戦闘だけに終始した家臣団とは異にした、木下藤吉郎ならではの知謀の勝利といえます。農民出身である木下藤吉郎は自然の営みを肌で知っていたのでしよう。彼はこの体験を活かし墨侯築城に成功し、天下人への道を切り開いたのです。

参考文獻
『木下藤吉郎墨侯築城への道』墨侯町発行
『墨侯一夜城築城資料』墨侯町発行
『町制一〇〇周年記念要覧』墨侯町発行
『墨侯町史』墨侯町発行
『すのまたのあゆみ』墨侯町教育委員会発行
『木曾三川流域誌』建設省中部地方建設局発行



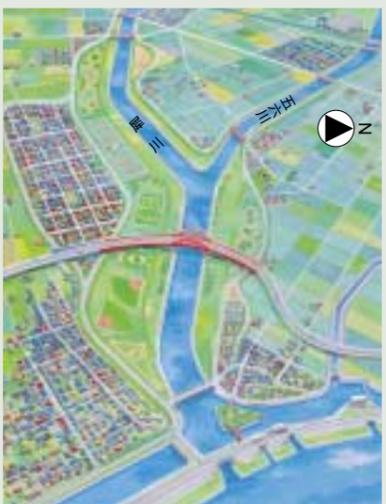
築城当時の一夜城模型

《犀川遊水地事業》

事業の目的

犀川流域は東西を長良川・糸貫川・揖斐川に、南を墨侯輪中北堤により囲まれていて、流域内の北部は根尾川によって発達した扇状地で、地盤勾配は二〇〇分の一〜四〇〇分の一ですが、南部は自然堤防にはさまれた低湿地となっており、地盤勾配も二〇〇分の一〜四〇〇分の一と緩やかになっています。こうした地理的条件から、南部は古来から内水湛水の常発地域として悩まされ続けており、当地区の歴史は水との戦いの歴史ともいえます。犀川遊水地事業はこれらの地域の内水対策事業の一環として実施するもので次の二つを目的としています。

- 一 遊水地の容量を増大することにより、貯留調節機能を増強し、排水機場による排水と併せて、長良川本川の負担を軽減しながら、内水被害の軽減を図る。
- 二 遊水地内の河道を整備することにより、内水の自然排水を促進する。



計画概念図

事業の計画

犀川・五六川の河道改修、並びに遊水地として容量を確保し、犀川第三排水機場等とあいまって長良川本川の負担を軽減しながら、洪水による内水被

- 一 周囲堤計画 基本的には現堤防線を尊重するが、狭小部は引堤を行う。
- 二 低水路計画 低水路は河道中央部に付替える。
- 三 高水敷計画 遊水機能の他、公園等としての利用を考慮し、第一高水敷は標高四・五m、第二高水敷は標高六・五mとする。
- 四 捨土地 現河川区域の右岸側三〇・五haの土地に、本事業による掘削土を捨土し土地利用を図る。

天王祭

- 7月第4日曜日 -

「天王祭」は墨侯の夏の夜の祭典。毎年、数千人の人々が集まり、たいへんな賑いをみせています。

この祭の社、天王社（津島神社の枝社）は、お天王さんと呼ばれて人々から親しまれ、牛頭天王をお祭りしています。

昔は津島の天王祭と同じ日に行われ、人々は朝早く舟で長良川を下り津島神社へ参拝し、受けてきたお札を夕刻までに天王社に納めることになっていました。

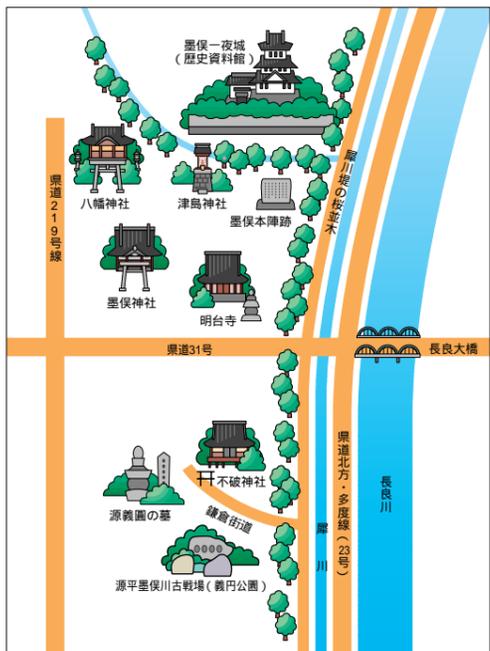
川とともに歴史を重ねた墨侯は、長い年月の間に、川の神様への敬虔な信仰心を育て、伝統的な祭りも生まれたのでしょう。

この祭りの特徴は、ダシ。日常生活用品や農作物で作った人形や風景、建築など、人々の手作りによる芸術性豊かなダシの数々は、訪れる人々の目を楽しませています。



墨侯町行事

- 桜まつり(犀川堤・一夜城址公園)..... 3月下旬~4月上旬
- 天王祭(天王社)..... 7月第4日曜日
- 秋の祭礼(墨侯全域)..... 10月10日
- 秀吉出世まつり(一夜城址公園)..... 10月中旬
- 商工祭(墨侯庁舎南駐車場)..... 11月第1日曜日
- 文化祭(さくら会館)..... 11月3日



- 公共交通機関利用
- JR東海 東海道新幹線 岐阜羽島駅より車.....15分
 - 名神高速 岐阜羽島インターより車.....15分
 - 名鉄新岐阜駅・JR岐阜駅より岐阜バス.....20分
 - 大垣駅より岐阜バス.....15分

気ままにJOURNEY

数々の史跡は美濃路の語り部

墨侯はかつての宿場町。美濃路を往来する旅人や墨侯川を行き来する船頭さんたちが、わらじを脱いでしばしの休息を楽しまれたころです。犀川のほとりには、五〇軒以上の遊廓が立ち並び、旅人や芸子さんたちでさめめく声に、夜を忘れた時代もありました。

美濃路を行く人々は、何も旅人だけではありません。象が通行したり、茶壺がお成りになったりと、実にさまざまな出来事が、宿場町の風景に彩りを添えていたのです。道端にたずむ石灯籠や石碑は、そんな時代の語り部です。町をそぞろ歩けば、昔ながらの宿場町の面影を見つかることができるのかも知れません。

《琉球使節の通行》

琉球王国は新しい将軍が就任する度に、



天王社に奉納された石灯籠

江戸へ慶賀使を派遣してしました。また琉球国王の即位の際にも、謝意を表すために江戸へ謝恩使を派遣してしました。

寛政二年（一七九〇）、琉球の中山王尚穆は、徳川家斉が將軍になったのを祝いするために、正使・副使以下九四名の使節一行を江戸へ派遣、すべての行事を終えた一行は、帰国の途にすぎました。

琉球使節一行の行列は、それはそれは派手やかなもの。琉球ならではの染め物、紅型のあでやかなもの、詩を吟じ、歌を合唱し、楽器をならしながらの行進で、人々の好奇的になっていったのです。

鎖国を続けた江戸の世に、異国情緒を味わえるのはこんな機会ならはたしたのでしょうか。

琉球使節一行が、東海道から美濃路を巡り墨侯宿を通った時には、多くの人々が道端に押しかけたといわれています。

この折、使節一行は天王社に奉納する石灯籠に刻銘文を記しています。

《象の墨侯通行》

享保三年（一七二八）文政町（ベトナム）の國王が、國産の象、頭を長崎へ運ばれました。このつち頭の象は、京都の中御門大皇、靈元上皇の御覽に供されました。その後、京を出立した象は、美濃路の墨侯宿を通って江戸へ。当時、今までに見たこともない長い鼻の動物が通るとあって、墨侯にも多くの見物客が集まりました。しかし、川に橋を架けることが禁じられていた時代とあって、象は川を越えたのでしようか、それは、こんな記録が残されています。

大きな馬が三頭乗れる舟を二艘つなぎ、それを板を張り土を盛って舟の前後はむしりて囲う。こんな大きな舟を急ごしらえし、陸と舟の境が象にわからないような配慮をして、川を越えたのでしよう。

墨侯川を渡った象は江戸へ行き、八代將軍吉宗はこれを見物、その後、象小屋に入れられて寛延年間（一七四八〜五二）に死んだと伝えられています。

《御茶壺の通行》

御茶壺は、將軍が飲む御茶を宇治で調整し、



膳本陣の門（現・本正寺）

壺に入れて江戸へ送るもので、江戸時代の年中行事の一つでした。

茶壺は三個でしたが、たくさん荷が加わり、大変いかめしいものでした。

この茶壺の墨侯宿通行は、元禄六年（一六九三）が最初。天保一一年（一八四〇）には、木曾川の大水で川留（舟の運行禁止）となったので、予定を変更して墨侯宿で泊まることになりました。

御茶壺は、墨侯宿の本陣に宿泊役人が不寝番をするという要人並の対応で、墨侯川は御座舟で渡すというものも、いさゝか茶壺といえ身分の高い人々と同様の取り扱いでした。

御茶壺が宿泊したという本陣は今も、墨侯本陣跡は、中町に残されています。また、膳本陣の門は、現在本正寺の山門になっています。

数々の浪漫と栄華を伝える、美濃路の宿場町

堤防に沿って、どこまでも続く、緑の並木道。ゆるやかに流れる川面には、墨侯一夜城が、その美しい姿を浮かべている。美濃路は、夢に続く歴史街道。時代を駆け抜けた英雄たちの浪漫と栄華。その熱き思いは、今も、宿場町の風景に息づいている。



墨侯一夜城（歴史資料館）

川とともに育った宿場町



美濃路見取図（東京国立博物館蔵）

JR名古屋駅から東海道線を利用して穂積駅へ。穂積駅からは車で約二〇分。長良川と揖斐川にはさまれた墨侯町は、典型的な輪中地帯。青い稲穂が波打つ田んぼのあぜ道を車で走っていると、石積みみの土蔵があちこちちらちらと点在しています。

この水屋と呼ばれる建物、輪中に暮らす人々の生活の知恵、母屋よりも一段高く築き、洪水時などの災害に備え、味噌や米を貯蔵。万が一の水害には、家族はここへ避難して水が引く時を肩を寄せながら待ちわびていたのです。

長良川や犀川、中須川など、周囲を河川に囲まれた墨侯は、川とともに暮らし、水と闘った美濃路の宿場町。激しくうねる川の流れるように、時代の激流を生き抜いた人々のドラマがたくさん残されています。



墨侯宿の石碑

大海人皇子を救った墨侯の女。かつて美濃には、大海人皇子の「湯沐」があり、湯沐とは、湯沐とは、皇太子や皇子の食糧などを確保する土地のこと。律令制度が確立していた大和時代、朝廷の勢力は美濃にも及んでいたのでしょうか。

天智天皇の弟、大海人皇子と、天智天皇の子、大友皇子が骨肉相争った壬申の乱の時、墨侯へ逃れた大海人皇子のドラマを、宇治拾遺物語はこのように伝えています。

大海人皇子は、出家して吉野に引きこもっていました。都では、大友皇子が政治の実権を握っていましたが、大海人皇子の力を恐れた大友皇子は、軍をさしむけて殺そうとしました。ところが、大友皇子の弟は、大海人皇子の娘、お父さんが殺されることを悲しんで、鮎を包み焼きした腹の中に、文を入れてこの計画を知らせました。

これを知った大海人皇子は、ただ一人吉野を出て、美濃の墨侯まで来て川を渡るうとしますが、舟がありません。困り果てて辺りを見回すと、一人の女が大きなたらいで洗濯をしています。

何とかしてこの川を渡りたいという大海人皇子をみて、女は「あなたはずっと普通の人ではない、何かわけがある人にちがいない」といって、たらいをひっくり返し、その中に大海人皇子をかくして、洗濯を続けました。しばらくすると、多くの兵がやってきて、女に「こを渡った



秀吉飄の馬印の起源とその漢詩（吉田龍雲氏 書・画）

者はいるか尋ねます。女は「立派な人が千人くらいの兵をつれ、龍のような馬に乗って飛ぶようにいかれました。あなたの兵はいくら追いついても駄目、今から引き返して、もつと兵を集めなくては危険です。」

大友皇子の兵は、その通りだと引き返し、大海人皇子は女に集めてもらった一〜三千人の兵をつれて大友皇子を追い、山崎で大友皇子を討ち取った後、大和の国に帰り天皇の位につくことができました。

この墨侯の女は、上宿の村社にお祭りしてある不破明神であったといわれています。

《墨侯川と千成瓢箪の馬印》

犀川堤を彩る千本の吉野桜。花の季節は終わったとはいえ、堤防沿いにどこまでも続く緑の並木は、歴史街道へのエントランス。犀川のほとりに美しい姿をみせる墨侯城は、ここが合戦の舞台であった日を静かに語りかけてくるようです。

墨侯城といえは、木下藤吉郎で有名な一夜城。当時、足軽結頭であった藤吉郎は、飛交う鉄砲玉にひるむことなく、恐れることなく夜を徹して、築城に成功したのでした。

その戦が終わった後、木下藤吉郎は墨侯川（現在の長良川）に「一艘の舟を浮かべ、弟の小一郎や蜂須賀小六、前野長康と瓢箪の酒を汲み交わし、同盟の誓いをしたといわれています。」

このとき、前野長康は汲み干した瓢箪を舟の竿に掲げ、私の一存で御大将木下藤吉郎の馬印にしたいと提案し、美濃攻略にはじめて使用したと伝えられています。

戦に勝つ度に、一つずつ瓢箪の数は増え

特集

伊勢湾台風

第三編

記録を塗り替えた高潮災害で、壊滅的な被害を受けた海岸・河川堤防

史上最大級の被害をもたらした伊勢湾台風の特徴の一つは、高潮による災害。激浪は、伊勢湾の各所において、既設の海岸堤防を決壊し、近世以降、干拓された地域を、再び、泥の海に沈めた。木曾三川の河川堤防も同様に、豪雨と高潮は、あつという間に堤防を呑み込んだ。記録を越える自然の猛威に、壊滅的な打撃を受けた海岸堤防、河川堤防。その原因と被災の実態を特集します。

伊勢湾台風前史

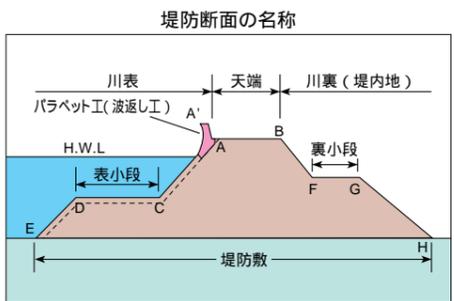
伊勢湾沿岸一帯の工業面での飛躍的な成長が始まったのは第二次世界大戦以降のこと。壊滅的な打撃を受けた終戦後の復興期、名古屋・四日市の港湾の整備が進み、また、木曾三川から得られる豊富な工業用水や電力を背景として、わが国でも最も伸び率の高い地域の一つとして、奇跡的ともいわれた経済成長の一役を担いました。また対外貿易においても、名古屋・四日市両港は、日本の代表港としての役割を果たしており、中部工業地帯の繁栄を背景に、その出荷指数の伸びは群を抜いていました。このような急激な伸展とともに、労働力が流入し、著しく人口は増加しました。主として名古屋及びその周辺、一宮・尾西方面の繊維工業、豊田・刈谷の自動車工業、四日市の石油コンビナート等を中心とする各産業都市に人口が集中し、急増の一途をたどっていました。

名古屋に焦点を合わせ人口増加状況をみると、昭和五年〜三〇年までの増加率は、南区三九・九%、港区二六・八%、北区三五・八%となっております。このことは、北区内陸工業が発達し、南区・港区が名古屋港を中心とした臨海工業地帯として、成長したことを示しています。

しかし、これら伊勢湾北部の臨海工業地帯のほとんどが、徳川時代以降に干拓された土地であり、きわめて低平地であったため、伊勢湾台風襲来に際し、台風史上最大級の被害を受けた主な原因となっていました。中でも、海岸及び河川堤防の被害は愛知県と三重県に集中し、破堤は一五箇所に、被害総額は三六〇億円（現在の価値で一六七〇億円）にものほりました。

区 別	破堤箇所数	破堤延長 (m)
海岸	39カ所	6,469
河川	76カ所	8,898
合計	115カ所	15,367

海岸堤防の被災状況



A'B:天端、AC、DE:表のりまたは外のり、BF、GH:裏のりまたは内のり、CD:表小段、FG:裏小段、A、B:のり肩、EH:堤防敷、ACDE面を保護するコンクリート張りのようなものは表護岸、BFGH面を保護するものを裏護岸という。

伊勢湾台風の特徴の一つは、高潮による被害が、わが国の災害史上でも最大であったことが挙げられます。高潮と波浪は伊勢湾内の各所において既設の海岸堤防を乗り越えて侵入し、堤防は各所で破堤、決壊しています。特に、昭和十八年の三三号台風で被害を受けなかった海部海岸を中心とした伊勢湾奥の海岸は、大きい高潮に襲われ、壊滅的な被害を受けました。海岸堤防の災害の特徴として、一般的に次のようなことが挙げられます。

- 一 堤高が低く、天端幅の小さい所ほど被災している。
- 二 法線形が凸や凹のカーブの所が弱点となり、破堤、または決壊している。
- 三 高潮の波の進行方向に直面している堤防が甚大な被災を受けている。

海岸堤防の地区別被害状況

《三河湾沿岸》
台風の中心から離れていたため、比較的潮位も低く、大きな被害は受けませんでした。
《南陽・海部・鍋田・長島・川越海岸》
最も大きな被害を受けたのはこれらの海岸堤防で、越波または打ち上げられた波しるぎの急激な落下により、堤防天端から裏法にかけて堤防本体がえぐり取られ、次にパラベットの倒壊。さらには堤体土の流失と共に法張りが破壊流失してゆき、ついに基礎地盤にまで及びました。石張りまたはコンクリート法にパラベットの

伊勢湾北部海岸被害状況表

区 域 名	破堤ヶ所数	破堤総延長(m)
南陽海岸	7カ所	511
海部海岸	4カ所	1,410
鍋田海岸	12カ所	758
木曾岬海岸	1カ所	1,060
長島海岸	2カ所	265
城南海岸	2カ所	930
川越海岸	3カ所	495

河川堤防の被災状況

河川堤防の被災の特徴として、次のようなことが考えられます。

- 一 海岸堤防の取付けとして三ト堤としていた箇所はほとんどない。
- 二 堤防部の構造上の弱点箇所は被災程度が大きい。
- 三 護岸の上下流側、構造物の上下流側、海岸堤防などの取付部、堤防高の不足または被覆の劣るもの、最大風速時の風向に直角に近い堤防法線部では被災の程度が大きい。
- 四 前面にかなりの高水敷、または波力を阻害する竹、灌木がある場合の被害は比較的少ない。
- 五 土堤に樹木などがある場合は、風によって樹木が揺れるので堤防の弱点となっている。
- 六 決壊部においてみられる特色であるが、護岸高にも関連があると考えられる。また最高高潮位が川表決壊高とならなければ、関連があると考えられる。

木曾三川河川被害状況表

区 域 名	破堤ヶ所数	破堤総延長(m)	決壊総延長
木曾川左岸	6カ所	1,160	5,679
木曾川右岸	5カ所	985	8,599
長良川左岸	8カ所	2,250	2,765
長良川右岸			2,315
揖斐川左岸			4,770
揖斐川右岸	3カ所	290	9,969
鍋田川	7カ所	1,070	

が施工されている部分では、波力でダイレクトに破壊された場合もありましたが、パラベットの傾倒して、表法張りとの接続部を破損させ、パラベットの裏に越波した海水や落下する海水がパラベットの裏から縫目の空きを通して、表側に吹き出し、これと一緒に土砂を運び出して空洞をつくり、次第に水量と水圧を増して、表法を破壊に導いたと思われるます。

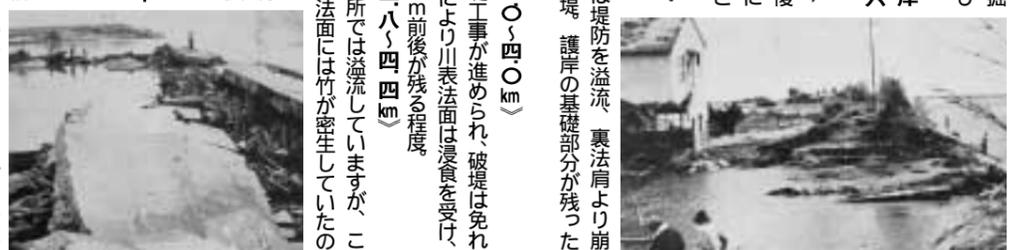


mを越す高潮は考えられませんが、たが、記録を破る高潮に襲われ、しかも堤防法線が高潮波の進行方向に直角なため、まともにも高潮被害を受けました。痕跡をみると堤防上二〇〜二〇m位は越えているようで、この越水、越波によって、被覆していない天端と裏法が崩壊、ついに胸壁の下がえぐられ、さらには護岸が崩壊し、破堤に至ったと考えられます。



木曾岬沿岸は、被災前には堤防前面に家屋が密集、低い堤防、小さな断面の悪条件に加え、護岸も整備されていなかったため、波浪と高潮によって、堤防は一瞬にして全延長にわたって破堤したものとされています。

《中勢地区》
中勢地区の津・松阪の海岸堤防は、一三三号台風の復旧工事により改良され、潮位も一三三号台風より低かったため、被害は少な



木曾川左岸、揖斐川左岸

《城南海岸堤》
この堤防は、昭和二一〜二七年頃、建設省直轄として施工された海岸堤防で、五五mの堤防高でした。当時の記録から考えれば五



《木曾川左岸》
木曾川左岸は、被災前には堤防前面に家屋が密集、低い堤防、小さな断面の悪条件に加え、護岸も整備されていなかったため、波浪と高潮によって、堤防は一瞬にして全延長にわたって破堤したものとされています。



《木曾川左岸一・八〜三〇km》
《木曾川左岸三・〇〜五・〇km》
特に昭和三〇年二月頃に施工された高上げ工事では、砂盛土で表土被覆もないため、

越波により洗掘され、決壊及び破堤。
《木曾川右岸一・〇〜〇・六km》
昭和二八年〜三〇年の災害復旧工事の成果により、ほとんど残存。
《木曾川右岸〇・六〜一・〇km》
高潮と波浪は堤防を溢流、裏法肩より崩壊ほとんどが破堤、護岸の基礎部分が残った程度。
《木曾川右岸二・〇〜四・〇km》
災害前に築堤工事が進められ、破堤は免れましたが、波浪により川表法面は浸食を受け、天端はわずか1m前後が残る程度。
《長良川左岸二・八〜四・四km》
堤防の低い箇所では溢流していますが、この付近の堤防表法面には竹が密生していたので波浪を減殺しており、裏法肩及び天端を洗掘程度ですみました。

木曾川左岸

座談会

被災者が語る伊勢湾台風の猛威

三重県長島町や桑名市にの城南干拓は、伊勢湾台風でも最も大きな被害を受けた所。高潮と波浪は、一瞬にして、海岸堤防や河川堤防を破壊させ、多くの人命や財産を呑み込んだ。そんな惨状の中、九死に一生を得た皆様にお集まりいただき、伊勢湾台風の体験を語っていただきました。



晴れ間を見せた伊勢湾台風当日

岡村 桑名市の市営住宅に住んでいます。家族は木曾川下流「事務所」に勤務する主人と、三歳と一歳の子どもの四人。私は三歳でした。主人は仕事柄、台風の日、まず、家にいませんが、あの日はかりは、ひょっこり帰ってきましてね。なんでこんな日に帰ってくるんだらうと。ラジオの天気予報では、大型台風だと放送されていましたが、あんな大きな台風が来るとは、思いもありませんでした。

大村 改めて、皆さんの体験談を読ませていただく、私もはあんまりひどいことはなかったと思います。生死をさまよったというようなことはなかったですが、でも、本当に恐ろしい体験でした。電気が早くから消えて、私の家はトランジスタラジオがなかった。情報が全く入ってこない状態でした。当時の私どもは、祖母に主人、小学二年生と幼稚園、四歳の子ども三人の六人家族、私は三八歳で、桑名に住んでいました。



市野 長島町の松陰で、一番被害が大きかった所に住んでいました。家族構成は祖父、祖母、父、母、それに当時二〇

歳の私と、長女二歳、一男一〇歳三男八歳の八人家族。その中で生き残ったのは、私と祖父、一男の三人だけでした。

田中 台風の当日、私は青年団で隣の集落へ踊りなんかの練習に行っていました。夕方帰宅した際には、雨はほとんどなくなってきた。隣の方が、「これはいかに、と我が家へ逃げてみえました。当時の家は平屋が多かったのですが、うちの納屋は二階建てでしたから、祖父は、「こんなひどい台風は、堤防へ上って見なきゃいかぬ」といっていましたが、畳をあげたりしてたんです。それなら近所の方、六人が家族で逃げてみえまして、それと同時にすく水がきたので、納屋の階へ上ったんです。



市野 私たちは同じ長島町でも、市野さんよりも少し上流側に住んでいました。当時、私は一八歳、伊勢湾に勤めていました。家族は、父と母、高一の長男、小学生の二女、一男の六人家族でした。当時は今のよう、週休二日制ではありませんが、終日の勤めを終え帰る頃には、四日市方面の空が、稲妻で光っていました。

藪田 私は当時三三歳、建設省の城南官舎に住んでいました。子どもは一歳二ヶ月。うちの主人は、岡村さんと同じで、悔いは残っています。小学生の二男は長島町の対岸の木曾岬まで流されたようですが、具体的なことは何も覚えてはいないようです。伊勢湾台風の一週間位前で、水防演習があったんです。懐中電灯を照らせば、ヘリコプターが助けにくるってね。でも、あいつの状態では期待できません。とにかく、この判断で行動すること。懐中電灯は、必需品ですね。



岡村 私も一応、避難袋は持っていたのですが、二晩、屋根の上でしよう。波や雨が揺れるし、屋根につかまっていたのが精一杯。結局、全部、捨てました。逆に、避難袋の紐で首を絞められ絶命した方もいらっしゃいます。何が必要なのかは、難しいところです。

大泉 私も持っていました。濁流に流れている間に、引っかけたり破れたりして、屋上へ避難した時には、身一つで、ただ、私は鈴鹿市出身で、台風には無頓着でしたから、やっぱり、住んでいる町の立地条件とか、気象情報だとか、情報を収集して判断することが、大切だと思います。

市野 私どもが住む長島町では、町が避難袋を全戸に配布したりと、熱心に水防活動に取り組んでいます。堤防も立派なものも完成しています。もう以前のような破壊はないでしょうけど、地震は怖いですね。阪神大震災のような地震に、堤防が耐えられるかどうか。やっぱり、日頃の心構えが肝心ですね。母屋は半壊しましたが、離れはなん

台風の日、いつも帰らなかったのですが、所長さんの指示で、夕方の八時頃帰ってきました。電車が不通になったため、電車通勤の職員は事務所待機、近在の職員は、自宅へ帰れ、ということでした。でも、八時頃は、雨がひどくて、堤防に海苔が打ち上げられ、雨や風で歩くのもままならない中を、やっと帰ってきたんです。



大泉 私どもも城南官舎でした。私は実家が鈴鹿市でしたから、台風の怖さを知りませんでした。当日も、のんびりしてありました。まだ二六歳でしたし、子どももいませんでした。当時、官舎には四家族が住んでいましたが、一つのご家族四人は全滅、遺体がドロボロの田んぼから、発見され時には、本当にショックを受けました。

あの日、主人も早く帰らせていたのですが、私も帰っていません。今はもうなかったと思います。

濁流は一瞬にして天井裏に

岡村 私は長島の生まれで、台風の恐ろしさは小さい頃から聞かされてきました。が、実際、ピンときませんでした。でも、主人から備えの大切さは聞かされてきましたので、オニギリを作ったり、貴重品を集めたりと、準備は整えていました。でも、あんな水がいつべんに押し寄せてしまっただけで、成す術もありません。

最初、お勝手に水が入り、そのうち、畳が浮いたんですが、その時主人が



とか暮らせる状態でしたから、皆さんのような避難生活はありませんでしたが、生活を立て直すには苦労しました。現在住んでいる南濃町では群発地震が続いています。食器はダンボールに数箱分、壊れてしまっ、地震対策も考えていかなければなりません。

藪田 私どもでも、あの時の子どもも結婚して、もう孫が生まれました。でも、もし屋根を破れなかったら、この日はないのですから、災害は本当に怖いものです。地震にしろ、台風にしろ、普段から家族で話し合い、情報収集や対策を心がけておきたいのです。



出席者（敬称略）

市野 喜吉	長島町在住	二〇歳	大泉 美千代	桑名市在住	二六歳
大村 朝子	桑名市在住	三八歳	岡村 しづ	桑名市在住	二三歳
田中 恵子	長島町在住	一八歳	藪田 清子	桑名市在住	三三歳

住所・年齢は、被災当時のものです。

TALK & TALK

藪田 『堤防が切れたぞ』って叫んだんです。もう私は腰がぬけてしまって、二人の子を抱え、まるでネズミ取りの中のネズミの状態。滝みたいな水が流れ込んできて、豊こと天井へ浮いたものから、なんとか天井裏へ逃げ込んだのですが、それでも水は、天井を突き破る勢いで、ふくらんでくる。天井裏から屋根へ脱出するのは、大変でした。本当に死に物狂い。

藪田 そうですね。うちも食事をしていて、炊事場のバケツがブカツと浮いたんですが、それを見て主人が、堤防が切れた、って叫んだ。それで天井裏へ逃げ込んだのですが、上ったらすぐ水がさっさと上ってきて、買ったばかりのテレビが沈んでいくのが情けないやら、悔しいやら、あっとい間に早くなってきたんです。主人は、『もったいめ、三人で死のう』といったんですが、この屋根さえ破れば、助かるからといって、それからは必死でした。主人は、屋根を頭突きしたりして、やっとの思いで、屋根の上へ上がりました。でも、今のような丈夫な屋根だったら、きつくと、ああはいきませんでした。官舎の屋根は質素なものでしたから（笑い）。それからは、一晩中、屋根と一緒に濁流に押し流されました。願いはただ一つ、このまま海へ出なければいい。でも、海は高潮で陸の方に流されて助かったんです。

大泉 私たちも同じ頃、濁流に吞まれて、



藪田

市野 あの日、結構、堤防が高くて、水が越していたので、よじ登るのに苦労しました。波は堤防を越えているし、崩れかけている。家を出る時は、妹をおぶっていたのですが、逃げてしまっで、堤防を歩いて落きました。竹藪のある所では息ができましたが、それ以外の所は、風や息ができません、苦しかったですね。でも、農協の方で堤防に向かって電気で照らしてくれましたので、それを目安に家族全員、農協へ避難することができました。近くの診療所には皆が避難していましたが、朝になってその一帯の家がなくなっていたのはショックでした。

市野 本日に、水が天井まで押し寄せてきた時には、もう死ぬんだと思いましたが、私たちが逃げた納屋も水に流されて、私はなんとか、屋根のひさしにつかまって、命を取り止めたんですが、親戚も家族もほぼ全滅です。でも、あの時、天井を破っていたら助かったかも…。

民話の小箱

はしくい えみじぞう
橋杭笑地蔵

むかし、むかしのこと。

墨俣川には大きな中州が二つあって、そこに三つの橋が架けてありました。

この橋も長い年月風雨にさらされて、いつの間にか朽ち落ち、その面影だけが残っていました。

嵯峨天皇の時代（八一〇～八三三）、橋のあったあたりが暗やみの空に向かつて金色の光を放っているのを村人が見つけ、

大騒ぎになりました。不思議に思った村人が恐る恐る調べてみると、

金色に輝く朽ちた橋杭が見つかり、その橋杭は、なんとお地蔵さんの形をしているではありませんか。

これを見た村人は早速その橋杭を掘り出し、お堂を建立し、お祀りしたのですが、

長い間、砂に埋もれていたため、完全な姿ではありませんでした。

都でこの話を聞き墨俣へかけた歌人の小野篁公は、

心願を込め立派なお姿の地蔵菩薩様を完成させました。

時代は下り天慶二年（九三九）のこと。

朱雀天皇の勅使がこの墨俣の地蔵堂で雨やどりをした際、その靈験あらたかなることを聞かされ、

和歌を一首、献詠されました。

朽ち残る 真砂の下の橋はしら また道かへて人渡すなり

すると、地蔵菩薩は口元に微笑を浮かべました。

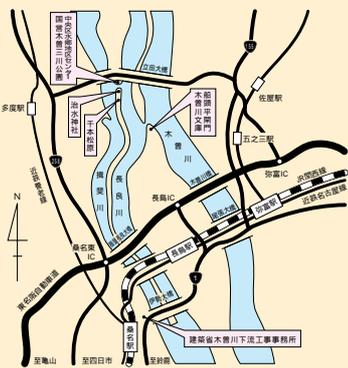
この尊いお姿を持した勅使は

「橋杭笑地蔵大菩薩」と名づけられました。以後村人は

「橋杭笑地蔵様」と申し上げ手厚くお祀りし、現在は明台寺本堂に安置されています。



木曾川文庫利用案内



《開館時間》午前9時～午後4時30分

《休館日》毎週月曜日・祝祭日・年末年始

《入館料》無料

《交通機関》国道1号線尾張大橋から車で約10分

名神羽島I.Cから車で約30分

東名阪長島I.Cから車で約10分

《お問い合わせ》

船頭平開門管理所・

木曾川文庫

〒496-0947 愛知県

海部郡立田村福原

TEL(0567)24-6233



編集後記

木曾三川連合水防演習と愛知県総合防災訓練が、5月24日、8時30分から木曾川左岸の立田大橋上流（14.6k附近）高水敷で大規模に行われました。

日蘭400周年記念事業の1つとして、近代治水の祖ヨハネス・デレーケ氏の日本での業績を見るため、デレーケの生まれたコリンスブラードの町の視察団一行（10人）とともにデレーケの孫J・J・デレーケ氏夫妻が木曾川文庫を訪問、改めて祖父の業績を認識されました。今回の編集にあたって墨俣町並びに関係の皆様は大変お世話になりました。紙面を借りてお礼申し上げます。

木曾川文庫ホームページ

<http://www.kisogawa-bunko.cb.moc.go.jp>

表紙写真

左上:墨俣一夜城（歴史資料館）

右上:明台寺

左下:史跡 美濃路

右下:新犀川（左は長良川）